

廃悪修善か聞信か

一、嘔吐

甲「先生、私はもうやめようかと思えます。」

乙「なぜですか。」

甲「いくら聞いてもわからぬからです。私はすでに三年間、困りぬいています。困れば困るだけ聞かずにはいられない。聞けば聞くほどわからないのです。」

乙「やめたければやめなさい。だが、やめることができるでしょうか。あなたは、困あげます。あなたは三年困ったと言います。僅か三年でへこたれてしまいますか。聖人二十年の苦悶求道をどうします。わかるまでご精進なさい。精進とは聞くことです。尊重の思いをもちつつ聞くのです。思念なさい。そして聞きなさい。如来を聞くのです。聞と思の世界に信は必ず生まれます。体は水や榮養を求め。胃は受けたものをはしから嘔吐する。嘔吐してもいいから、南無阿弥陀仏の榮養をとるのです。南無阿弥陀仏は榮養であるとともに薬です。必ず、我という胃病を根治して、この榮養をそのまま受けつける時があります。三年も五年も、少しも受けつけぬ我慢な胃病です。昨日も六時間、今日も六時間、あれだけ聞きつつ、ただの一句も受けつけないで、それでもそれでも嘔吐するのです。けれども、如来の救いに間違いはない。必ず『ハイ』の返事すら間に合わない聞即信の世界がわかります。」

二、勝手な信

甲「先生、聞いてください。私には一人の兄と二人の姉かおりますが、その兄や姉が寺に参つて念仏するくせに、とてもケチくさいのです。私はあんな吝嗇な人間がよくも「念仏の、御法の」と言われると思えます。」

乙「そうですか。どんなにいけないのですか。」

甲「それがです。私が借りた僅かなお金すらたびたび催促します。兄弟だといつても少しも兄弟らしい気はしません。それから………等、等、世間がどんなに人格者だ、信仰家だと言つても、私から見ればおかしいくらいです。」

乙「詳しいことを聞きましたが、あなたは勝手な人です。あなたは、借りたものも催促しない。あなたの勝手でもみな聞き入れてくれる人を善人だと言い、それをさらに念仏者だと言おうとするのです。兄様よりも、あなたこそ、如来の前にもつと深く自己を清算すべきです。あなたは人の立場は少しも考えないで、貪欲になりきり、瞋恚をおこし、愚痴にのみ動かされているのです。そしてその醜悪な自己を一切の上になげかけていることを知らないのです。ですからあなたには、懺悔も感謝も、念仏もないではありませんか。ですから、あなたにとつては、兄様ばかりでなく、この地のおおかたの人が悪人に見えるでしょう。十八願どころか、あなた的一切を聞いた時、感ずるものは、『我慢』の二文字だけです。仏法がわかつた気で、我慢を強く通してゆくあつかましさか習慣になつて、金剛の生活態度にでもなつた気であることほど恐ろしいことはない。私はお気に召さなくても申しあげます。」

甲「でも、これがなおらないのが凡夫です。」
乙「それごらん。あなたは一切をありのままに暴露したではないか。あなたの悪いことはなおらないと勝手に許し、兄様姉様の事をば直そうとするのですか。」

三、

甲「先生、ちょっと聞いてみますが、教えてくださいませんか。」
乙「ちよつと聞きたいとは何が聞きたいのですか。」
甲「先生、どうしたら極楽にまいますか。」
乙「そんなに問うあなたは、平素少しは気にかけますか。本気で聞きますか。」
甲「いえ、別に気にかかりませんが、ちよつと問うてみるのです。」
乙「宗教は身をも心をも打ち込んで求むべきです。ちよつと聞いてみるくらいでは何の益もありません。これを聞かねば、生きられも死なれもしないという、真剣な世界に与えられる世界です。今お話したとて何にもなりません。」

四、聞いて信ずる世界

甲「先生、私の心は聞いてくれません。聞いても聞いても私のものになりません。」
乙「聞いてあなたのものにしてどうしようと言うのです。」
甲「聞いて……聞いたら、もつとはよい心になられようと思われれます。それにちつともよい心になつてくれませんか。」
乙「聞いて信ぜよとはあつても、聞いてよい心になれとはありません。」
甲「しかし聞いて信じたらよい心になれるではありませんか。」
乙「聞いて信ぜよとはあるが、聞いてよい心になれとはありません。」
甲「それでも信俗二諦とありますから、俗諦が守られないようなことではいけません。」
乙「俗諦？ 俗諦は、聞いた者も聞かん者も守らねばならないのです。しかし俗諦で解決のつくような、浅い世界ではないのです。たとい信の上から俗諦が守れるとしても、それは信の上のことで、先に俗諦を行うておいて、それから信じるのではないのです。悪人こそ名号を聞いて救われるのです。」
甲「それでも私は、聞いた時はああこれでよいと思つているのに、悪い心がおこると、すぐグラツと崩れてしまうのです。」
乙「そのあなた全体にまきおこる煩惱は俗諦で解決のつく領域ではない。そのグラツと崩れたままが如来の本願に救われるのです。」
甲「それではよくならなくてもよいのですか。」
乙「よくなられますか。善くなりたいと願えば願うほど、悪そのものが見えるではありませんか。」
甲「悪が見えれば見えるだけ善人になりたいのです。」
乙「如来の本願は悪人正機です。」
甲「そこがわかりません。悪人正機と聞いても善人になりたい。善人でなければおちつけないと思われれます。」

乙「善人もおちつけないし、悪人もおちつけないのです。」

甲「それではどうすればいいのですか。」

乙「どうかできればしてごらんなきい。善人になることができると思う間は、まだ、久遠の業障にぶちあたらないのです。久遠の業障に目覚めた時、自力の手は出なくなりません。あなたはまだ高慢です。その高慢が如来の真実を拒むのです。善人になられるならなつてごらん。」

甲「では先生、善人はいけないのですか。」

乙「誰がそんなことを言いました。善人になりたいということは、善人になれたということとはちがいます。善人になれたら救われることも不要ではありませんか。十の善には、十の悪が見えるはずです。善人だとうぬぼれたことは善人になれたこととはちがいます。うぬぼれから出なきい。如来は悪人をこそ救うのです。」

甲「それでは悪人が救われると知るのでですか。」

乙「それでは口先が遊び事しているのです。ただ、悪人が救われるのです。如来の大慈悲によつて。」

甲「善人は救われないのですか。」

乙「善人でも救われます。しかし地上の善は彼岸へは役立ちません。一切が彼岸から仏から廻向される大善によつて救われるのです。地上の『少善根福德の因縁によつては』浄土へは到られないと説いてあります。地上の小善に囚われているものは、浄土の大善を忘れているのです。」

甲「その浄土の大善とは、何のことてありますか。」

乙「南無阿弥陀仏の大善、絶対善です。」

甲「さようでございましたか。私は小さな善に高上りしていたのです。」

乙「如来は永遠の太陽です。太陽を忘れて蠟燭の火を燃やすのは滑稽です。南無阿弥陀仏こそ、それ自体独立せる大善です。この大善こそ信じられるものだからです。しかもその信ずる南無阿弥陀仏の南無のところです。」

甲「ああ、それでは私の機には、関係なく、善でも悪でも。」

乙「如来のみ永遠を貫くのです。」

甲「生きた仏を殺していました。」

乙「いくら悪が見えようと、ありのままでおちつけます。善にも悪にもおちつけないわれが南無阿弥陀仏におちつけるのです。」

甲「まことに高上がりしておりました。」

五、地獄であるうと

甲「先生、私はどうした幸せ者でございましょう。み仏さまのお慈悲を聞かしていただく身に生まれさせていただきまして。」

乙「それはそれは結構なことですね。どうです。念仏すれば地獄へ行く、念仏をやめたら幸せにしてやると言われたらどうします。」

甲「やめるのやめないのと言って、耳があれば聞こえ、目があれば見えるようなもので、やめようにもやめられませぬ。やめられない念仏のために地獄へつれて行かれようと、禍が来ようと、しかたがありません。」

乙「如来のみ心のままに行きさせてもらいましょう。ありがたいことを聞きました。」

六、生命のない殻

甲「先生、私がいよいよ信心に夜明けさしてもろうたのが十年前ですが。どうも近ごろは聞かれるような説教が来ません。……………」

乙「十年前は十年前、水に描いた絵は残ってはいません。今日のあなたはそうです。十年前の月の光は、今の道を照らしはしない。今日三宝の対する帰依がなければ、十年前もうそだったのです。今日のあなたはどうですやら。」

甲「一念帰命で、前念命終、後念即生、ちゃんと卒業しましたのじゃ。」

乙「卒業生ですか。道理で、あなたは聞いてみてやるのでしよう。」

甲「それはお言葉が悪いが、お礼参りですな。」

乙「私はあなたをお気の毒に思います。あなたは、生命の抜けた殻をたいせつにしているのです。殻だけ持つと高慢になる。合掌と求道のない宗教には生命はない。正しい血の通った真理は、この人の前に影をひそめる。宗乗の型を弄ぶ者や、権勢のために如来を道具に使う者や、聞いたことが高慢の種になっている同行など、如来を盲目にし、我執を立てて、自らが作った自力の堅い信を握っていて、それが気がつかぬのです。お互いに気をつけさせていただきましょう。」

七、智慧の世界に

甲「先生、私は長い間無信仰の生活をいたしておりました。けれども、如来はこの迷いの夢をさましてくださったのです。私はありがたいのです。何という幸せ者でしょう。見るにつけ、聞くにつけ、ただありがたい。もったいない。そればかりです。私は芝居にも、活動にもゆきたくはない。前はそれがすきてした。ぼくの友人が「恋だ、女だ」と言っているのを聞いたり、つまらぬ名誉や、金のことなど考えているのを見るとたまらなくなり、私は幸せ者です。」

乙「あなたは何歳になりましたか。」

甲「二十五歳になりました。」

乙「あなたの心持はわかります。けれども、あなたはまだ二十五歳です。その感激一点張りの世界は長続きしないかも知れません。一度は通らねばならぬ世界ではあっても。その美しい世界から、進まねばなりません。真実の信は不断着です。平凡の非凡です。あなたにはまだ、智慧光に照らされて、一切衆生の内的運命たる久遠の業障が信ぜられていませぬ。人生と自己とをありのままに諦観する静けさがない。でも、不断の求道と内観とが、あなたを深い信につれてゆきましよう。本気でお聞きなさい。」

甲「何だか水をかけられたような気がします。これから本気で求めさせていただきましよう。」

八、精神と肉体

甲「信仰の力が肉体を支配しますか。」

乙「支配します。精神を支配するほどの力が肉体に無関係のはずはない。」

甲「それなら病気でも治りますか。」

乙「治ることもあります。」

甲「それでも、浄土真宗では病気を治すなどと言わないではありませんか。」

乙「それは、それが目的でないからです。そしてまた、そんなことを目的とした信仰は、無上道を獲得するという絶対的な信仰の目的を忘れて邪道に墜ちるからです。そして、病気の治った体も、やがては死にます。そうした相対の世界、常識的な世界を超えて、もつと第一義的な絶対界に関与しようとするのが仏教です。ですから、病気を治すというようなことを掲げません。掲げないということは、ついに信仰の力が肉体に無関係だということではありません。」